

## 香港、ヴィクトリア公園にて — インドネシア人女性家事労働者とその可能性 —

伊 藤 眞

### I はじめに

筆者が最初に香港に関心をもったのは、インドネシア、トラジャを訪れた際に立ち寄ったランテパオの書店にて香港で働いていたという女性に出会ったのがきっかけだった。マレーシアへ出稼ぎに行くトラジャ人は珍しくないが、香港というのは初耳だった<sup>1)</sup>。しかもその女性は、香港へ家事労働者として働きに行ったのは「神学校」入学のためだったと言ったのにはさらに驚いた。出稼ぎで得た資金を元手に市場で小商いを始める者はそれほど珍しくない。しかし資金を自分の教育のために投資する者はきわめて珍しい。そうした新しい出稼ぎのスタイルに興味を覚えたことが、片言の広東語も知らない筆者を香港へと向かわせたのである。

こうした点に関心をもつに至った背景には、先に述べたことと繋がるもうひとつの理由がある。それは社会的弱者としての家事労働者像への疑問といってもよい。インドネシアでは海外に移民労働者として派遣される人々を総称して“TKI” (Tenaga Kerja Indonesia の略語。「インドネシア労働者」を指す)、とくに女性労働者を指す場合には、“TKW” (Tenaga Kerja Wanita の略語。「インドネシア女性労働者」)とも呼ぶ。このインドネシア語それ自体には「移動」を意味する語はないが、その語が含意するところは、「海外へ向かう、派遣される」労働者である。たとえば、韓国の工場で働くために出国する者たちも、“TKI” (「テー・カー・イー」と読む) と呼ばれる。一方、“TKW” (「テー・カー・ウェー」と読む) と呼ばれる女性たちの場合、その多くは家事労働者としての派遣であり、時に介護労働者もそれに含まれる<sup>2)</sup>。インドネシアの新聞・メディアなどを通じて、“TKW” に関して頻繁に報道がなされるが、その内容の大半は、彼女らが派遣先の雇用主から受けた暴力行為、不当な行為あるいは派遣先の国における無慈悲な処罰に関わるものである。一方では「外貨獲得の英雄」などとおだてながら、他方で、必ずと言ってよいほど、弱き存在、「犠牲者」であることを前面に押し出して描き出すのである。実際、派遣先の国の多くは、家事労働者は「住み込み」で働くことが義務づけられている。それにより、寝場所が確保されるという面もあるが、いつも雇用者家族に監視され、昼夜を問わず仕事を命じられやすい、またハラスメントや暴力行為を受けた場合でも逃げ場がないといったきわめて不利な状況に置かれることになる。このような状況にあることを認めるならば、彼女ら

がつねに危うい立場にある事実を見失ってはならないむしろ当然である。けれども、それだけでは家事労働者一般についての概括的な議論はできるかもしれないが、主体としての個々の存在は見えてこない。また、果たしてそうした脆弱性についてのみ関心を払うことで、現代のインドネシア人家事労働者像を描き出せるのかという疑問が、とくに香港で働く彼女たちの主体的活動に関心を抱いた理由である。

なお、本報告のもととなった調査は、文科省科学研究費補助金基盤研究（B）による調査研究プロジェクト「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の社会人類学的研究」（2010～2012年度、研究代表者伊藤眞）により実現したものである。ここに記して謝意を表する。

## II 香港と家事労働者

### 1 背景

今日にまで続く家事労働者が香港にやって来るのは、1969年、海外駐在員が同伴したフィリピン人家事労働者が最初であったといわれる。1970年代になると、香港人の家庭でもフィリピン出身の家事労働者が雇用されるようになるものの、1974年時点での外国人家事労働者の数はわずか881人であった。その後、1980年代に入ると、新中間層の生長と女性の社会進出の拡がりとともに、家事労働へのニーズが高まり、1980年代後半になると家事労働は国際労働市場における「新商品」として急速にそのマーケットを拡大していく<sup>3)</sup>。労働供給国としては、フィリピン、つづいてタイが先行するが、1990年代以降インドネシアがそれに仲間入りし、さらにアジア通貨危機、スハルト退陣を経た2000年以降になると、インドネシア人の急速な増加が目立つようになる<sup>4)</sup>。もちろんこうした外国人労働者の増加は、香港だけに限られるわけではない。インドネシアからの海外出稼ぎ労働者の受入国は、従来からのマレーシアに加え、サウジ・アラビア、アラブ首長国連邦などの中東諸国、そしてシンガポール、台湾、韓国といったアジアのNIEs（新興工業経済地域）へと広がっていったからである<sup>5)</sup>。そして2008年にはフィリピン出身者を抜いて、香港における外国人家事労働者の半数以上をインドネシア人出身者が占めるまでに至っている<sup>6)</sup>。つぎにILOからのプレスリリース記事を紹介しておく。

「毎年、正規の書類をもったおよそ70万人のインドネシア人移動労働者がより良い収入を求めて海外へ行く。行く先は、中東、東南アジア、東アジアである。これらの正規労働者のおよそ80%は家事労働者として働く女性である。BNP2TKI（「インドネシア海外労働者派遣・保護庁」＝筆者注）の2008年データによれば、現在430万人の正規雇用の労働者が海外で働いている。非正規の経路によるインドネシア人労働者の数に関する信頼しうるデータは存在しないが、これまでの研究によれ

ば正規の移民労働者の数をはるかに上回ると推定される。」(ILO 2010 年 12 月 17 日付けプレスリリースより)

表 1 インドネシアの国際移動労働者数 1969-2007 (出典：平野 2009)

経済 5 ヶ年計画 / 年		目標数	送り出し数 (人)	女性労働者数 (人)	性比
第 8 次経済計画 (2005-2009)	2007	**	696,746	543,859	28.1
	2006	**	680,000	541,708	25.5
	2005	**	470,744	325,045	44.8
第 7 次経済計画	1999-2004	2,800,000	2,312,937	1,714,052	34.9
第 6 次経済計画	1994-99	1,250,000	814,352	503,980	61.6
第 5 次経済計画	1989-94	500,000	651,272	442,310	47.2
第 4 次経済計画	1984-89	225,000	292,262	198,735	47.06
第 3 次経済計画	1979-84	100,000	96,410	55,000	75.3
第 2 次経済計画	1974-79	非設定	16,052	3,817	320.5
第 1 次経済計画	1969-74	非設定	5,624	*	*

表 2 公式ルートにもとづくインドネシア移民労働者数 2001-2007

年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
サウジ・アラビア	99,224	213,603	171,038	203,446	150,235	307,427	251,217
マレーシア	74,390	152,680	89,439	127,175	201,887	270,098	222,198
シンガポール	33,924	16,071	6,103	9,131	25,087	9,075	37,496
香港	22,622	20,431	3,509	14,183	12,143	13,613	29,973
台湾	35,986	35,922	1,930	969	48,576	28,090	50,810

【表 1】によれば、移民労働者数は、1974/79 年から 1999/2004 年の間で、144 倍も増加している。こうした全体的な増加傾向の中で女性移民労働者数も、1974/79 年における 3,817 人から 1999/2004 年における 1,714,052 人と飛躍的に増加している。こうした女性移民労働者数の増加は、労働の女性化、家事労働の商品化に示されるような経済のグローバル化を通して今日まで続いている。

一方、【表 2】は 2001 年以降の移民労働者数である。サウジ・アラビアとマレーシアが断然多い。両国では、インドネシア人家事労働者に対する暴行事件が多発しているにもかかわらず人権擁護などの観点からの法整備が決定的に遅れており、それを理由に、インドネシア政府は 2011 年 8 月よりサウジ・アラビアへの家事労働者の送り出しを中止する決定を行うに至っている。マレーシアに対しても法整備を待つという措置をとっている。ただし、そうした事件が多発するにもかかわらず渡航者が多いのは、両国ともイスラーム国であること、サウジ・アラビアの場合、滞在期間を利用し

てメッカ巡礼を果たせるという期待感、さらに斡旋会社訓練センターでの待機期間が短く、かつ現地での給与から斡旋業者費用が天引きされないことなどが理由として考えられる<sup>7)</sup>。他方マレーシアの場合には、隣国という距離的な近さや同じマレー系住民が多数を占めるという同胞感情が作用していると考えられる。ついでに述べるならば、マレーシアには正規ルートによる渡航者数をはるかに上回る数のインドネシアからの密航者がいるといわれる<sup>8)</sup>。

現在、インドネシア人労働者が移住労働者として向かう目的地は世界の68カ国にまたがっているといわれるが、香港は、その中にあって労働条件に恵まれた目的地としてもっとも好まれる受け入れ国のひとつといわれる<sup>9)</sup>。確かにその放任主義的政策ゆえに、香港は他の受け入れ国には見言い出し得ない利点をもっている。第一にそこでは外国人労働者に対して結社の自由が保証されており、外国人労働者組合の設立も認められている。第二に、週休が法的に保証されている。ただし、週休は雇用者側の都合により、必ずしも日曜日とは限らない。第三に、外国人労働者の集会のために公的場の使用が許されている。ヴィクトリア公園など公共的広場の利用は、大規模な集会を開く以外は自由である。また、講演会そのものの催しのために公的施設の使用も許可制であり、宗教を問わず認められている<sup>10)</sup>、などの諸点があげられるだろう。

つぎに、1997年に香港へやってきたというインドネシア女性の話を引用しよう。

「私は香港に14年前の1997年にやってきました。私の故郷は東ジャワのブリタルです。19歳のときに結婚しましたが夫は小作で自分の田んぼがありませんでした一でも今はありますけどね。結婚後、生活が大変でした。二人の子どもができました。私は他人の田んぼで働いたこともありましたが、仕事が見つからないことが多かったのです。要するに、私たちは非常に貧しかったのです。私が31歳になったとき、TKIとして海外で働くことを決めました。斡旋会社に名前を登録してから仕事が見つかるまで4ヶ月間待ちました。私が目的地として香港を選んだのは、ここでは外国人労働者がよく保護されていると聞いていたからです。仕事を待っている間、広東語<sup>11)</sup>を習いました。

1997年に私が香港に到着した当時は、香港にも、ここヴィクトリア公園<sup>12)</sup>にもインドネシア人はそんなに沢山はいませんでした。私はヒンドゥー教徒だったので「ヒンドゥー・ダルマ・インドネシア」(Hindu Dharma Indonesia)<sup>13)</sup>の会員になりました。この組織は1996年に設立され、会員は58名でした。休日にはハッピー・バレーにあるヒンドゥー寺院<sup>14)</sup>をみんなでお参りました。」

この女性の語りからは、1990年代末期における香港のインドネシア人労働者の様子が浮かんでくる。1997年は香港が中国に返還され年である。その当時、まだイン

ドネシア人の労働組合は結成されていないが、すでに出身地や宗教を基盤とする組織化が見いだされる。この女性が香港返還を意識していたかどうかはわからないが、少なくとも香港は労働環境が相対的に整備されているという認識をもっていたことはわかる。なお、筆者が日曜日のヴィクトリア公園でこの女性と話す間、その傍らでは15人の若い娘たちがヒンドゥー舞踊の練習をしていた。聞くところによると、近々、「インドネシア労働者協会」主催の舞踊コンテストが開かれ、50近くの団体が参加するという。ヴィクトリア公園では、毎月必ずインドネシア人労働者の催しが開かれる。そうした機会には、公園中央にある「芝生の広場」（インドネシア人たちはその場所をそう呼んでいる）は、彼女らによって埋め尽くされる。

## 2 香港のヴィクトリア公園<sup>15)</sup>

香港のヴィクトリア公園は毎週日曜日、インドネシアから働きにきた家事労働者であふれかえる。ヴィクトリア公園とは香港島東北部、銅鑼灣（Causeway Bay）と呼ばれる地区の一角にある公園のひとつである。公園正面入口にはヴィクトリア女王の座像があり、その向かい側には、香港中央図書館<sup>16)</sup>がそびえ立つ。公園はイギリス統治時代の1957年に完成、19ヘクタールに及ぶ公園敷地内には、ウォーキング・コース、テニスコート、バスケットボールコート、池、児童遊園地、高齢者向け健康器具なども配備されている。香港市民にとっては、朝夕の散歩、木陰での読書など、都市の喧噪を忘れることのできる憩いの場所のひとつであるが、週末になるとその様子は一変する。というのは、公園はインドネシアからやって来たおそらくは、数千にも及ぶ女性労働者によって埋め尽くされ、「リトル・インドネシア」が出現するからである<sup>17)</sup>。

そこでは、公園の一角にシートを敷き、持参した弁当を食べながら友人たちと談笑する者、楽器を持参し、グループで歌や踊りの練習をする者、労働組合のメンバーによる学習会やコンサルティング、「ミニ図書館」と称して大きなカバンに書物をいっぱい詰めて、本の貸し出しをおこなう者、はたまたマルチ商法の報告会を開く者、あるいは、同じインドネシア人を商売相手に、弁当、アクセサリや衣類の販売を行う者までさまざまである。それは、商品交換を第一目的とするものではないが、大勢の人びとが出会い、交換し、交渉し合う場として「バザールの状況」をなしていると言ってもよいだろう。

筆者がヴィクトリア公園を訪れたのは2010年3月以降のことなので、もちろん、そこで展開する様々な活動を十分観察しえたわけではない。しかし、この公園にやって来るインドネシア人女性の中に見いだされる明るい表情、あるいはたくましさは、きわめて印象的であり、なおかつ、人権を奪われ、虐げられた存在といった一般に流布した家事労働者像を書き換えるに十分なインパクトをもつものであった。以下の記述は、そうした筆者のもった印象が必ずしも的確はずれなものではなく、「マレーシア、

台湾、香港の中で、香港が働くのに一番よい」と語るあるインドネシア人家事労働者の言に示されるように、現在の香港が許容する一定の社会的・政治経済的な条件のもとに生み出されるものだとすることを示唆したい。

ヴィクトリア公園は、香港に働きに来る者ならば、まず最初に訪れる場所である。筆者は、公園で一人ベンチに腰かけていた女性に話しかけてみた。その女性は、中部ジャワの出身で、香港に来る前は、台湾で働いたことがあるという。

「私は当初は台湾で働いていました。ところが、母が危篤になったという報せがあり、一時帰国したところ、3年間の契約のはずが1年間で解雇されてしまいました。それで今度は香港に移りました。台湾では香港のようにきちんと休日が認められていませんし、インドネシア人の数は多いかも知れませんが、こんなに多くのインドネシア人が集まる場所ありません。ここは天国(surga)みたいです。私は電車を4回も乗り継ぎ、1時間もかけてここまで来ました。遠いので毎週来ることはできませんが、月に一度は来たいと思っています。まだ友達はできていません。でも、すぐにいい友だちができと思っています。」

この女性は、友だちをもとめてヴィクトリア公園にやって来る。後述する労働者作家パニユ・インサニの著作の中にも、幹旋所の訓練センターから香港に向かう友人に「ヴィクトリア公園で会いましょうと誓い合った」という記述がある。インドネシア女性労働者にとって、この公園が香港そのものを象徴する格別な意味をもっているのである。

公園内で繰り広げられるパフォーマンスに注目すると、先に述べた伝統舞踊、タンパリンを使ったイスラーム唱歌、あるいは、インドネシアン・ポップを巧みなステップを交えながら歌う者もいる。一方、服装にも一定のヴァリエーションが観察される。気温の高い時期ならば、下はフィット・ジーンズで、上はTシャツもしくはブラウスを着用し、頭部をジルバブで覆う者はそれほど多くはない。伝統的なイスラーム女性の服装を身につけるのは、やや年長の女性に見られるものの、とにかくインドネシア本土で見られるほど一般的ではない。もうひとつ特筆すべきなのは、ボーイッシュな服装をしたいいわゆる「トム・ボーイ」(男装の女性)がかなりの頻度で観察されることである。ある者は、そうした出で立ち是一种の流行(トレンド)に過ぎないと言い、またある者は、彼女らの一部はレスビアン<sup>18)</sup>であると言う。男装をした一人にそうした服装をして雇用者に注意されないかと尋ねたところ、「雇用者は服装には無関心です」と答えた。しかし、そうした「トム・ボーイ」たちが故郷に帰るときには、「普通の女性の服装」に戻るとも付け加えた。こうしたパフォーマンス、服装の多様性からも、彼女らが解放感の中で澁刺とした感情表出を行っていることが見て取れる。

### Ⅲ 香港におけるインドネシア人労働者の諸団体ー女性労働者の組織化

香港は、外国人労働者に結社と政治行動の自由を与えている例外的存在であり、それゆえに、さまざまな諸団体が見いだされる。香港における家事労働者は、法律的に、週休日を与えられていること、組合を組織すること、公的場でデモをおこなうなど集団的政治活動が認められている。つぎに代表的な4つの団体を挙げておこう。

#### 1) 「インドネシア移民労働者組合」(IMWU = Indonesian Migrant Workers' Union)

「インドネシア移民労働者組合」は、1999年に設立された最初のインドネシア人による労働組合である。この組合は2003年、香港人の組合連合の一つである香港職工組合連盟(HKCTU (Hong Kong Confederation of Trade Union))に加盟している。IMWUの主たる目的は、労働者の権利擁護であり、家事労働者にはたんなる「お手伝い」(*pembantu*)ではなく「インドネシア人移民労働者」(*buruh migran Indonesia* もしくは略語でBMI<sup>19)</sup> という)としての意識向上を働きかけ、さらに労働法2004年39号(「海外インドネシア移民労働者の派遣と保護に関する法律」)の廃棄を当面の目的としている。同法は、「斡旋会社を保護するものであって移民労働者のためのものではない」と組合幹部は主張する。

#### 2) 「香港インドネシア移民労働者協会」(ATKI-HK=Association of Indonesian Migrant Workers in Hong Kong)

この組織は労働組合ではなく、社会的性格のもつ団体(association)である。同団体は2000年に当初11人のメンバーにより設立された。その指導的存在となった人物は、現在も香港在住である。彼女は自分の経験を次のように語っている。

「私が最初に香港に来たのは1999年のことでした。まもなく雇用者と問題が起こり、解雇され、自動的に住むところを失いました。それで私はシェルターをもとめてベチューン・ハウス(Bethune House)を訪れました。ベチューン・ハウスは、アジア移民センターというキリスト教系のNGOによって運営されていたので、その利用者の大半がキリスト教徒のフィリピン人でした。私はムスリムでしたが彼女らからいろいろなことを学びました。そして、あるフィリピン人アクティビストが私に向かって、インドネシア人労働者も組織化しなければいけないと助言してくれたのです。私はその翌年、関心を共有する仲間とATKIを設立しました。」

この団体の発端が、イスラーム教徒とキリスト教とが連帯することから始まっているのは、いかにも香港らしいエピソードである。この団体の主な活動は、個々人が抱える雇用者や斡旋会社との問題について個別に対応し、カウンセリング、コール・センターや話し合いを通じて問題を共有し、解決に向けて一緒に行動することに重点を置いている。メンバーは班単位に別れ、ヴィクトリア公園のほかいくつかの集会所

をもち、そこで移動相談所を設け活動をしている。

3) 「香港インドネシア人移民労働者連合」(KOTKIHO =Coalition of Indonesian Migrant Workers in Hong Kong)

2000年12月、この連合は、インドネシア移民労働者組合の提案にもとづき、他の6団体の加盟により結成された。すなわち、*Forum Komunikasi Mu'minat Peduli Umat* (FKMPU), *Yogya International Club* (YIC), *Amanah*, *Sanggar Budaya*, *Majelis Taklim*, *Persatuan Dakwah Victoria* (PDV) であり、翌年にはさらに *Al Mubarakah* と *Mar'atush Sholihah..* が加盟した。この連合の特徴は、加盟団体の名称から想像されるように、左翼的な労働組合、イスラーム諸団体、さらには伝統舞踊グループとが相並んで加盟している点である<sup>20)</sup>。この異種混合的な柔軟性は、街頭でのデモンストレーションにおいても発揮され、フィリピン、ネパール、タイ、スリ・ランカなどの諸団体とも協賛しておこなうこともある。この連合は、しばしば教育、文化的フェスティバルを開催する。また、突然解雇され寝場所を失った労働者のためのシェルターと訓練センターをもっている。訓練センターでは、土曜・日曜を利用して年長のメンバーが英語やコンピューター教室を開いている。

4) 「不当請求に対するインドネシア人連合」(PILAR=the United Indonesians against Overcharging)

この連合は、「インドネシア人移民労働者協会」の提唱にもとづき、2007年4月に設立された。当日、16団体が参集してワークショップを開催、そのワークショップ決議が本連合を生むことになった。16団体の中には、イスラーム諸団体や舞踊グループが含まれ、さらに2009年にはあらたに7団体が加盟した。「ピラル」は、インドネシア及び香港にある幹旋会社によって高額の諸費用が課せられていることと、そうした制度をインドネシア政府が支えていることとに異議申し立てを行っている。在香港のインドネシア領事館が、労働期間2年未満のインドネシア人労働者が幹旋業者を変更することを禁止した通達(第2258号)を発令したとき、ピラルはその通達を取り消すようにインドネシア政府に要求した。デモとインドネシア領事館との交渉の末に、インドネシア領事館はその通達を取り消すことに合意した<sup>21)</sup>。

上にあげたのは香港においてインドネシア人が組織した主要な団体・連合である。こうした団体がインドネシア人労働者に対して果たす役割は大きい。インドネシア領事館、あるいはより希ではあるものの、香港政府に対する団体交渉のほか、日常的な啓発、教育、そして娯楽活動をも含め、それらがインドネシア人労働者にとって社会的、心理的な安寧効果を与えていることは間違いない。そして、注目すべきことは、これらの活動が香港で働き始める以前は、団体的活動や政治に全くといっていいほど無関心な女性らによって担われ、推進されていることである。先に見たように、ATKIを



組織した女性リーダーでさえ、元はといえば何も知らず、フィリピン系 NGO 団体が運営するシェルターに逃げ込んだことがきっかけであった。ある女性はこのように語ってくれた。

「ジャワで暮らしていた頃は、政治的な事柄はまったくわかりませんでした。むしろ、政治というのは怖いものだと感じていましたから、政治的活動をするなんてなおさらです。いまでもそうした感情はあります。スハルトの時代には、政治的問題に関わることは非常に危険だったことは知っていますよね。そのことはトラウマとして残っていました。それで、香港にやってきたときも、政治的な問題に積極的に関わっている労働者組織には、全くといっていいほど無関心でした。でも、あるとき、私は突然解雇されてしまったのです。どうしたらよいかわからず、最後にシェルターに行きました。そこで私は友人から、この労働組合（IMWU）について教えてもらったのです。そのときをきっかけに、私は自分たちが置かれている状況についてよく知ろうと意識するようになったのです。」

筆者に以上の体験談をしてくれたのは、現在では、ヴィクトリア公園から徒歩5分ほどのところにあるインドネシア領事館へのデモに際しては、しばしばその先導役を務める、香港滞在歴7年になるインドネシア人労働者組合の幹部である。そして、彼女と同じような話を、組合メンバーから幾度も耳にした。つまり、彼女らの大半は、故郷を遠く離れたこの地において厳しい現実と直面し、仲間となるべき人々と出会う中で政治的な「目覚め」を経験したのである。組合活動に熱心な者との出会いは、彼女に人間関係のみならず、彼女が置かれた社会的条件を自覚するための重要な契機となっている。出会いを提供するのは、追い詰められた者どうしが集まるシェルターもそのひとつであることはいうまでもないが、もうひとつ忘れてはならないのは、異国からやってきた労働者たちが集まる場所である。どこの国でも、異国からやってきた労働者たちはどこかに特定の参集の「場」を作り出す。香港の場合、そうした参集の場所としてもっとも吸引力のあるのが、ヴィクトリア公園なのである。

#### IV インドネシア人女性移民労働者の文学活動

インドネシア女性労働者のさまざまな活動に注目した場合、もう一つ忘れてならないのは、彼女らが進めている文学活動である。フィリピン出身の家事労働者の中には、専門学校、短期大学、あるいは大学卒業者も見られるなど高学歴の者が見いだされるのに対して、インドネシア出身者場合、その多くが中卒、あるいは高卒程度の学歴である。したがって、インドネシア語で作文を書くぐらいの執筆経験しかもっていない。けれども、彼女らは実に多くの著作物を出版しているのである。香港で働

くインドネシア人女性労働者の間でいくつかの文学グループが見いだされる。もっとも著名で数多くの会員をもつのは、「フォーラム・リンカール・ペナ」(FLP=*Forum Linkar Pena*「ペンの輪・フォーラム」という意味である)である。先に引用したバニュ・インサニも FLP の会員であった。また、「風の劇場」(Teater Angin) という 15 人前後のメンバーからなるグループもある。後者のメンバーによれば、「FLP はムスリムであることを全面出すが、私たちの場合は労働者であることを強く意識している」といって立場の違いを強調した。FLP のメンバーは、facebook などを利用して書いた文章を互いに添削し合い、文章の研鑽をはかっているという。そのまとめ役の女性は、「香港は他のどこよりも文学活動が盛んだ。というのは、私たちは毎週会えるし、インターネットも自由に使える」という。FLP の会長によれば、2002 年以來、インドネシア移民労働者による著書がおおよそ 50 冊も刊行されている<sup>22)</sup>。また毎月 2 回、日曜には、幾人かのメンバーが集まって草稿について議論するときもある。彼女らが発表するのは、詩、短編、あるいはエッセイであり、長編小説は稀である。そのテーマとなるのは、愛、信仰、家族、あるいは異国にあって見聞し、経験した事柄などである。そこにはフィクション的要素も加えられているが、多くの場合において主人公は香港で働く彼女ら自身である。出版された著書の裏には必ずといってほど、写真付きの著者プロフィールが掲載されているが、そこには彼女らの誇らしさが感じられる。ここで二人の著者を紹介しよう。

### 【バニュ・インサニ (Bayu Insani)】

バニュは中部ジャワに生まれた。18 歳のとき近隣の村に住む男と結婚するが、新夫には定職がなかった。まもなく自宅が火災で焼け落ち、中にいた夫は、救急車で病院に運ばれることになる。夫の入院費用は親族から借金してなんとか支払うことができた。夫との間に子どもが二人できた後、夫が再び入院し、その治療費や子どもの学費を捻出のためにバニュは海外に出稼ぎに出ることを決意する。マレーシアで 2 年間働いた後、2005 年に香港にやって来る。バニュは香港に出発する前の斡旋会社の訓練センター(待機所)での生活について詳細に述べている。少々長いが彼女の記述<sup>23)</sup>をしばらく追ってみよう。

「あるとき、海外派遣の仲介人がやってきて、再び海外に出稼ぎに行かないかと勧めました。私が再び出稼ぎに出ない限り、私たちの借金を返す当てはありません。夫は私が出稼ぎに行ってもいいと言いました。でも私は、海外に行ったらもう二度と愛する子に会えないのではないかと思います、恐くもあったのです。でも結局は、子どもには、学費のためにお母さんが働きに出なければいけないことを説明して家を出ました。」

## 幹旋会社の待機所での生活

「待機所に着くと事務所に連れていかれ、どの国に行きたいかと訊ねられました。事務所の方では、私が以前にマレーシアで働いたことがあるからといってシンガポール行きを勧められました。でも私は、香港に行きたいと言い、結局はそれが認められました。でも、香港のことは何も知らず、ただ香港の方がシンガポールよりも給与が高いと思ったのがその理由でした。

待機所では、ジルバブ（スカーフの一種＝筆者注）をはずすように命じられました。また髪の毛も短く切るように言われ、非常に悲しくなりました<sup>24)</sup>。最初の夜は眠つかれず、わが子は今頃何をしているだろうかとそのことばかりを考えました。

当初は友人もおらず、寂しかったのですが、まもなく私の気持ちを理解してくれる友人ができ、親しくなりました。また次第に友達も増えてゆきました。待機所には非常にたくさんの人がいて、さまざまでした。私は自分と考え方が近いと思われる人を友だちにしました。待機所には、香港帰りの、もう長いこと待機所にいるためか、あるいは、お金をたくさんもっているためか傲慢な女の人もいて私は好きになれませんでした。

待機所では、目的地についての授業、そこでの働き方についても、講習を受けました。仕事の仕方だけではなく、将来の雇用主とのコミュニケーションの取り方についてもみんなで一緒にやらされたので、学校時代の子どもに戻ったような気分でした。でも、学校といっても、ここでは香港語、つまり広東語の文法授業もありましたからその点は小学校とは違いますね。

好むと好まざるとに関わらず、待機所では連帯責任制でした。仕事では各人が、料理、清掃担当などを分担し、早朝の体操が毎日の日課でした。幹旋会社の事務所を掃除する者、市場へ買い物に行く者、調理する者、水浴び場の清掃、庭の掃除などの仕事がありました。こうした仕事を私たちは班ごとに一緒におこなったのです。

朝の当番が終わると、私たちは交代で水浴び場に入り、そのあとで、朝食でした。朝食が終わると、私たちはそれぞれ担任のいるクラスで授業を受けました。待機所では、規律正しくすることなど、多くのことを学びました。

待機所では、予期し得ない不思議なことも起こりました。憑依現象(kesurupan)<sup>25)</sup>、逃亡、それから金銭がなくなることもありました。日曜日には家族や友人と面会することができたのですが、家族と会うと無性に家に帰りたくなりました。」

## 幸福な日

「友らと長い間待った後、ついに job<sup>26)</sup> の日がやって来ました。香港の婦人がやってきて、私に家で仕事するように求めていると告げられました。仕事の内容は、二人の娘の世話をするだけで仕事は非常に楽だということでした。その申し出に同意すると、彼女は二つの条件を示しました。第一は休暇問題で、月に2度の休暇のみ。もう一つは給与問題で、標準以下しか支払えないということでした。私はあまり長

く考えることもなく、ずっと待機所で job が来るのを待つよりはよいだろうと思い、署名しました。ビザが降りるのを待ちながら私は祈りました。すべてがうまく運び、雇い主が私によくありますようにと。

日を経るに連れ、待機所は同じ目的をもつ友が増えていきました。毎日、job を得て、ビザが降りて出発する者がいる一方で、新たにやって来る TKW 候補者の数も増していくようでした。待機所にいた期間中、私を退屈させなかったことは、日曜日の家族との面会は別にして、ビザが降りて出発が近い者がいると、彼女らを驚かすための奇妙な催しが必要だったことです。それはバケツ一杯の水を頭から浴びせたり、水が淀んでいる池の中に放り込むことでした。それを率先しておこなうのは、事務員と親しい者でとことんじめた後、夜になると皆で出発する者の安全をお祈りしたのです。私も同じ目にありました、早朝、突然、池の臭い水をかけられました。みんな見て笑っているのですが、こちらは体中が臭くなってたまりませんでした。そして、私と3人の友人のビザが降りた時には、私は心の中で、神に感謝しました。私が待機所にいたのは4ヶ月間でしたが、なかには1年近く待ってもビザの降りない者もいたのです。それどころか、job が雇用者側によって何度もキャンセルされる者もいました。

実際、その日私はどれだけ幸福に感じたことでしょう。夕方には、私たちは互いに折り合い、抱き合って別れの挨拶をしました。近い将来、インドネシア人が集まる場所として有名なヴィクトリア公園で会うことを友人と誓い合いました。私はすぐに家族にもこのことを伝えました。子どもと夫もやって来て、旅立ちの挨拶の言葉を交わしました。その翌日には私たちは待機所の本部があるジャカルタに移動し、出発の手続きを済ませるとともにメディカル・チェックを受けました。」

以上は、バニユが香港に向けて出発するまでの語りである。斡旋会社の待機所は、概して閉鎖的であり、なかなか外部者の立ち入りを許可しない。そうした中で、バニユは精細ある記録を残しているのでここに紹介した。次の記述は、同じくバニユが香港で働き始めた家族との生活記録を要約したものである。バニユは、雇用者の母親であるママと彼女自身との感情の交流についても言及している。

バニユの雇用者は妻と二人の子どもと一緒に暮らしていたが、その雇用者のフラットの向かいには、雇用者の母親（「ママ」）と未婚の子どもたち、そして甥を含めて13人の男たちが暮らしていた。そしてバニユは、ママの料理の手伝いをするよう雇用者から告げられる。心の中でこの仕事は契約書に書かれていないではないかと思いつつ、斡旋業者から「文句を言わず、言われた通りにしなさい」と教えられているので抵抗できず、ママを手伝い始める。ところが、料理におけるママの動きはとても俊敏でそれについて行けない。ママは11種類の副菜を調理し、それを13枚の皿に均

等に配分していく。バンニユは、「ここには、年齢による上下関係などないのだ」と感心する。やがて、最初の契約が終了まであと数ヶ月という時になって、バンニユは雇用者から「もう子どもに手がかからなくなったから契約を延長するつもりはない」と告げられる。そう言われて、バンニユは一日中部屋で泣きはらす。彼女はママと別れたくない。数ヶ月後、彼女は解雇（terminated）される。彼女は、解雇されてから2週間以内までには次の雇用者を見つけないと香港から退去しなければならないという厳しいルールに直面する<sup>27)</sup>。

このバンニユの自伝的物語において、彼女は簡潔な文章で、ママとの感情の交流とその突然の終結を綴っている。ママと気持ちが通じ合っても、そうした感情の永続性は、雇用者—被雇用者という関係の中では、なんら保証されないのである。

### 【メガ・フリスティアン (Mega Vristian)】

メガ・フリスティアンは西ジャワのタンゲランに生まれ、香港に17年間も生活している年長者の一人である（2012年現在）。彼女はこれまで数多くの詩編、短編を発表しており、彼女の作品の一部は、インドネシアを代表する全国紙「コンパス」にも数回取り上げられたことがある。香港在住のインドネシア女性労働者の作家の中で最もよく知られた存在の一人といってよいだろう。彼女が詩作を始めたことについては、次のようなエピソードがある。

香港で働き始めてしばらくして、彼女は作品募集に応募した。応募するにあたって、彼女は自分の名前を出さずに、雇用者の名前を使った。やがてその作品が入選したという知らせが雇用者宅に届いた。まだ幼い自分の子どもの作品が入選したという知らせに最初は耳を疑ったが、やがてその作品がインドネシアからやって来た使用人メガのものだと知る、雇用者はメガの才能が伸びるように、彼女の執筆活動を支持するようになった。メガには、コンピューターを買い与え、労働時間も楽にした。以来、メガはずっとその雇用者宅で働いている。もはや雇用者の子どもは成長して手がかからなくなったが、雇用者はそれに頓着することなく、メガとの雇用契約を延長し、今日に至っているという。

2009年、メガは若い仲間を誘って文学グループ「テアトル・アギン」（風の劇場）を結成した。そして結成して2年後に刊行されたのが「ヤムチャ」（飲茶）という、短編・詩編のアンソロジーである。以下にメガによる短編「人形とギア」を簡単に紹介しよう。この短編において、メガは語り手として登場する。

「ある日私は頭痛がするので、近くの店に頭痛薬を買いに外出する。私が道路を渡ろうとすると、見るからにインドネシア人らしき女性が突然大きな少女人

形を手渡し、無言のままその場を立ち去る。私はあっけにとられるが、しばらくすると、その女が再びやって来て、説明を始める。なぜ私に人形を手渡ししかといえば、道路を歩いていると向こう側に雇用者の婦人が歩いているのが見え、見つかりそうになったからだという。さらに、その女が続けて述べるには、その大きな少女人形は、彼女と「彼女の妻」との養子なのだともいう。香港においてレスビアンはそれほど珍しくはない、その人形はその女と彼女のパートナーとの愛の証だったのだと私は納得する。それから数日後、私はその女と再び会い、コーヒーショップで話をする。女が抱える少女人形には、フリル付きの色鮮やかな洋服が着せられていた。そこで私は、最近、身近なインドネシア労働者の間で話題になっていたギアという男児のことを思い出す。ギアはまだ3歳だが足元に足かせをつけられていた。誰も世話をする者がいないので父親が自分の子どもに足枷をつけたのだ。私は最後に自問する。なぜ養女になった人形が綺麗な服を着ているというのに、その一方でギアはそんな悲惨な環境に置かれているのだろうか。」

この短編でメガはレスビアニズムから題材を得つつ、香港という環境で、虚構の愛に生きる女と妻のいない夫とその幼児とを対比させている。メガの場合、元来が詩作を得意分野とするだけに、体験的語りというよりも「文学的寓話化」の度合いが高い。しかし、あるとき、メガに訊ねたところ、人形を持つ女は決してフィクションではなく、現実に存在したという<sup>28)</sup>。一方、香港で働くインドネシア人女性におけるレスビアニズムは、もはやそれほど珍しい現象ではない。facebook で女同士の関係を公言している者もいれば、あるいは、永遠の愛を誓って「結婚式」をあげるケースもある<sup>29)</sup>。しかし、こうした現象は、異郷にあって女たちだけの世界に暮らす彼女らがとりうる状況的な生活戦略であると見なした方がよいだろう。というのは、そうしたレスビアンのカップルも帰国すれば通常の性的志向に元に戻ることが一般的だからである。

以上は筆者が入手した限り<sup>30)</sup>でのインドネシア人女性労働者の作品のごく一部に過ぎない。書くという作業が自己に内省の機会を与えることは確かであろう。書くことの効用は、労働組合など諸団体でも意識されており、詩や短編を募集し、優秀作品には賞状・賞品を与えることもある。さらにインドネシア領事館でもそうした作品を募集している。発表する機会は自費出版に限られず、エスニック・メディアと総称できるような諸種の媒体、すなわちタブロイド型の新聞(週刊)としては、“Suara”「声」、 “Apa Kabar” (「お元気ですか」)、“Berita Indonesia” (「インドネシア通信」)、イスラーム系の月間小冊子としては4種 (Noormuslima, Iquro, CahayaQu, Irsyad)、また台湾と香港に在住するインドネシア人による Horizon という文芸誌もある。さらに現代では、インターネットを活用し、Web サイトに文章を掲載する場合も考慮すべきだろう。そうした多数の発表媒体が存在すること自体が、発信者としての彼女たちの存

在を示す明確な証しとなっている。繰り返して強調するならば、彼女らインドネシア人移民労働者は、厳しい環境の中で虐げられるだけの受動的な存在では決してなく、むしろ積極的な発信者であると言っているのである。

## V 結語：家事労働者の創造性と未来への戦略

派遣先となる国々は、たんに移民労働者たちが生計手段を得るためだけにある場所ではない。たとえば、そこでは人々との出会い、組織活動に参加し、自らの表現活動を通して、自己啓発を行う場にもなっている。主体的な活動を通して自分自身が変わる場をも提供しているといってもよいだろう。そうした側面から、派遣先の国で起こりつつある、ふたつの動きについて述べておこう。

ひとつはインドネシア政府がバックアップする「オープン大学」(universitas terbuka) など、教育に関わるここ1、2年の出来事である。海外に居ながらにして高校の卒業資格取得のための授業や大学卒業資格を得るための教育機会が海外で働く労働者に対して与えられるようになったことである。これは香港に限らず、シンガポールでも実施されている。もうひとつは、帰国予定者を前提にした「起業家セミナー」の開催である。いずれも、ネガティブに捉えれば、一定の現金所得をもつインドネシア移民労働者たちに狙いを定めた新ビジネスという側面をもつが、労働者たちがそうしたビジネスを通じて、あらたな夢を描き出しているという意味において、ポジティブな点をより評価してもよいだろう。

実際、その多くが経済的事情により道半ばで学業を断念せざるを得ず、あるいは進学そのものの可能性を絶たれてしまった経験をもつ彼女たちにとって、祖国から遠く離れた地であって働きつつ、休暇の時間を利用して再び勉学し、卒業資格を取得するということは、非常に魅力的である。さらに大学資格については言うまでもないだろう。大学の学位取得については、すでに10数年前からフィリピン系の「セント・マリー大学」が香港には存在した。ただ、「セント・マリー大学」の場合、そこで教鞭をとるF氏によれば、講義は平日に開かれるため受講しにやって来るのは、香港で結婚する機会を得た元家事労働者が大半で、その数も多くないという<sup>31)</sup>。これに対して「オープン大学」はインドネシアの国立大学であり、日曜日に開講、しかもインターネットによる授業もあるので、数百単位の受講生を得ているという。

一方、起業家セミナーについては、彼女らの帰国を促すインセンティブを与えるとともに、まず、帰国後の生活の指針を与えるという意味で役立つだろう。折角貯蓄した資金を新築経費や親の巡礼費用で一度に消費されてしまうことはしばしば聞かれる話である。また、「家事労働」のノウハウをいくら積んでも、それを新しい職業に生かすとしたら斡旋業者の訓練センター（待機所）ぐらいしかないといわれる。それよりも、「今度は自分たちがボスになる」といった家事労働者側の野心と向上心に乘じ

て、起業を促すことは、彼女らのもつ経済力を社会に還元させるという効果をもつであろう<sup>32)</sup>。香港では2010年から「チプトラ大学」がホテルを会場にして「起業家コース」を開設している。大学といっても、こちらは「セント・マリー大学」のように学位取得を目的とするのではなく、一般講義とインターネットのオンラインで授業を進めるという。しかし、初年度は900人、2年目には1000人に及ぶ登録者がいたことは、家事労働者に対して強い吸引力をもつと考えるべきだろう。

こうしたオープン大学や起業家セミナーの登場は、家事労働者として海外に赴くことの意味を変える可能性をもち、派遣先の国のイメージをも変えていくかもしれない。なぜなら、故郷に踏みとどまり続けていたならば断念せざるを得ない教育の機会がある国に行けば可能になるからである。そう考えると、冒頭に紹介した当初はきわめて例外的な行動のようにみえたトラジャ女性の選択は、むしろ時代の一步先を進む行動であり、決して例外的な行動には見えなくなる。トラジャの地にとどまっている限り学費を捻出できないために香港にやって来た彼女の行動は、たとえば故郷のジャワで勉学の機会を得られず、香港で働くことによってそれを可能にする女性ときわめて近似しているからである。そして、海外で働きながら得られる教育機会という情報が浸透するならば、そうした機会を選択する者は必ずや増加するであろう。

最後に香港という労働の場について。筆者が本報告を「ヴィクトリア公園」と題したのは、その公園が果たしている多機能的な役割—すなわち、出会いの場、集会の場、学びの場、踊り歌うパフォーマンスの場、売買の場、そして儀式の場としての役割—が香港がもつ特徴をよく表していると考えたからである。香港の移民政策を含めた環境条件の相対的な優位性は、インドネシア家事労働者たちの可能性を引き出し、文学活動に代表されるようなさまざまな創造行為を可能にしているが、これは香港という環境だからこそ可能なのだろうか。筆者はそうには考えない。むしろ、香港という環境条件、とりわけ移民政策を受け入れ諸国にとってのデフォルトとするならば<sup>33)</sup>、そこで働く移民労働者は香港で働く移民労働者と同様の創造性を発揮するをもつことができるのではないかと考える。その意味で、香港の有り様は今後の移民受け入れについてのひとつの方向性を示すといえる。次なる作業は、香港の移民環境をより精査していくことになるだろう。

## 注

- 1) その後、香港での調査の折、南スラウェシ出身者（トラジャ人を含む）の有無について在住のインドネシア人に訊ねたが、同地域出身者を知る者はいなかった。私がランテパオの書店で出会った女性は、実際にきわめて珍しい派遣先を選んだことになる。
- 2) 台湾の場合、インドネシアからのTKWを「介護労働者」として、一方香港の場合は「家事ヘルパー」として受け入れる。ただし、実際上の仕事内容はいわゆる「家事労働者」と変わらない。
- 3) 家事労働者の増加は、香港のみならずシンガポールでも同様である。
- 4) 1950-60年代、インドネシアにおける社会的混乱の中で、数多くの華人系住民がインドネシアから帰還し、最終的には香港に定着した者が多い。彼らの中には、インドネシア・レストランやインドネシア人向け



の雑貨店を営んでいる者が見出される。【Tan 2011】を参照。

- 5) 【安里 2004】は、インドネシア人家事労働者の雇用が増加した一因として、彼女らへの給与が他国出身者と比べて低賃金であったこと、そこには斡旋業者と結びついた政府の黙認があったことを指摘している。
- 6) 2010年3月、筆者が在香港インドネシア領事館で得た情報では、2009年12月末現在の在留インドネシア人は145,000人、インドネシア人労働者（TKI）は131,000人とのことであった。
- 7) ちなみに香港では、契約開始からはじめの7ヶ月間は、給与から渡航書費用・訓練センター諸費用などが天引きされる。
- 8) 南スラウェシのパレパレ港から東カリマンタンに渡り、ヌヌカンからサバ州に入国する者の大半は密入国者であると言われている。これについては【伊藤真 2009】を参照。
- 9) たとえばシンガポールと比べた場合、シンガポールは2011年まで週休を法制化せず、また集会、結社の自由は今日に至るまで認められていない。こうした労働条件により、シンガポールから香港へ労働の場を移す者はいても、その逆はなかなか見出しがたい。
- 10) 筆者は一昨年の12月、Causeway Bayにある「SOGO デパート」の傍らの道路に舞台を設置し演劇パフォーマンスをおこなっているのを目撃したことがある。外国人労働者たちが、年末の人通りの多い公的空間を一時的に占有し、そこで自分たちの政治的な主張、感情を表出する機会をもつことが可能になっているのも香港の「放任主義」の結果と言えるだろう。
- 11) インドネシア人が香港で働く場合、事前に広東語の基礎を学んでおくことが香港側の斡旋会社の要望により、義務づけられている。
- 12) 後述するように、香港島の Causeway Bay にあるヴィクトリア公園は、インドネシア人女性労働者たちが休日に集まる場所として著名である。フィリピン人女性労働者の場合、休日には歩行者天国となるビジネス街セントラル（中環）周辺に集まる。ヴィクトリア公園にインドネシア人が集まるようになった背景として、近くにインドネシア領事館があることが考えられる。
- 13) インドネシアにおいて国定宗教として認められた「ヒンドゥー教」の公式名称である。
- 14) ハッピー・パレーはコーズウェイ・ベイから近い。ここにヒンドゥー寺院があるかどうか未確認である。他のインファーマントはその存在を否定した。
- 15) インドネシア人の監督・女優ロラ・アマリアにより「日曜日の朝ヴィクトリア公園で」と題するインドネシア人女性労働者姉妹をヒロインにする映画も制作されている。
- 16) 後に触れる文学活動にとって、中央図書館が近くにあることは非常に重要である。なぜなら、そこでは図書館設置のコンピューターを自由に使用できるからである。
- 17) ヴィクトリア公園以外でインドネシア人が集まるのは、九龍側にあるスターフェリー、そしてモスクに近い九龍公園である。但し、参集場所についての正確なマッピングはまだ行っていない。
- 18) 香港で働くインドネシア人家事労働者たちは「女だけの世界」を形成しており、そこではインドネシア本土よりも高い頻度でレスビアニズムが認められる。この点については、インドネシア本土のメディアにも取り上げられたことがある。
- 19) 彼女ら家事労働者は、自分のステータスを自称する場合、この語を使用する。
- 20) Ming-yan Lai (2010) は、そうした特徴を、「統一と連帯における差異性」"difference in unity and solidarity"と呼んでいる。
- 21) この情報は、「ピラール」が配布したパンフレットの記載に基づいている。
- 22) "Kata Pengantar" p.iii, in Bayu Insani & Ida Raihan 2010 *TKW Menulis, mereka saja bisa, kenapa Anda tidak?*, Leutika, Yogyakarta.
- 23) 2011年夏、筆者は香港で彼女と会うことができた。彼女からは記述が実際の体験にもとづいていることを確認した。その後、彼女はインドネシアに帰国し、香港での収入を資金としてジョグジャカルタ近郊に雑貨店を開いている。
- 24) 筆者が訊いた限りでは、どこの訓練センターでも同様の扱いを受けるようである。彼女らはここで、女性性とイスラームであることの尊厳を傷つけられ、「労働商品」になるように馴化されていくのである。
- 25) 一種のヒステリー症状であろう。抑圧的な集団生活を強いられた状況下で起きている点は、かつてアイワ・

ウォンによって「抵抗の精神」の現れであると記述されたマレーシアの日系工場で起きた集団ヒステリー現象との共通性が認められる。

- 26) 海外に派遣される仕事をバニユは“job”（「業務」）と呼んでいる。訓練センターでの慣用的に用いられる語である。
- 27) 香港において雇用者が契約終了の数ヶ月前にバニユに解雇を伝えたのは、何ら問題のない行為である。契約終了直前になって解雇を申し渡されると、つぎの雇用者を見つけ出す余裕を与えられないまま帰国しなければならなくなる。この通称「2週間ルール」は労働者にとって悪しき規則であると見なされており、契約延長が微妙な時期に入ると、彼女たちは非常に神経質にならざるを得ないという。
- 28) そう言われてヴィクトリア公園を眺めてみると大きな人形を抱えた女性労働者を数人目撃した。ただし、これがインドネシア人レスビアンにおける新たな「民俗」になっているかどうかは定かではない。
- 29) Sim, Amy 2010 を参照。
- 30) 家事労働者による諸作品は、香港の書店はいうまでもなく、インドネシア国内の書店でも入手することはなかなか困難である。というのは、多くの場合、自費出版もしくはローカルな版元から出版されているためである。それでも、近年、家事労働者たちの旺盛な執筆活動に目をつけたインドネシアの出版社が原稿募集をおこなっている。
- 31) ただし、土曜日に開かれる高校単位取得の授業には数多くの家事労働者が参加するというから、そもそも大学の学位を望めるだけの学歴所持者がインドネシア家事労働者には少ないということかもしれない。
- 32) 2012年には、Rihanu Alifa *BMI Hongkong Sadar Investasi*（「香港のインドネシア移民労働者よ、投資を意識せよ」）というタイトルで、金投資を推奨する書籍が刊行されている。
- 33) もちろん、香港の移民政策を手放しで評価するわけではない。相対的な先進性であり、たとえば、それは移民の集会や結社の自由を容認しないシンガポールと比較すれば、歴然とするだろう。

## 参考文献

Antara

2007年3月5日付け。

安里和晃

2004 「東アジアにおける家事労働の国際商品化とインドネシア人労働者の位置づけ」『異文化コミュニケーション研究』18: 1-34。

Bayu Insani and Ida Raihan

2010 *TKW Menulis. Leutika*: Yogyakarta.

Gills, Dong-Sook

2002 “Introduction: Neoliberal economic globalization and women in Asia”, in, Dong-Sook Gills & Nocola Piper (eds.) *Women and Work in Globalizing Asia*. London: Routledge.

平野恵子

2009 「インドネシアの海外雇用政策 —— 「移住労働の女性化」を中心に」国際移動とジェンダー研究会編『アジアにおける再生産領域のグローバル化とジェンダー再配置』一橋大学・伊藤 研究室発行、2009年3月、30-48頁。

Hugo

2005 “Indonesian international domestic workers: Contemporary developments and issues”, *Asian Women as Transnational Domestic Workers*, Shirlena Huang, Brenda S.A. Yeoh, Noor Abdul Rahman (eds.) Ch.2 pp.54-91.

ILO

2010 「プレスリリース」12月17日付け。

伊藤 眞

2009 「ボーダー・エコノミー —— サバにおけるブギス移民の生活戦略」『人文学報』408: 31-47。

Ming-yan Lai

- 2010 “Dancing to different tunes: Performance and activism among migrant domestic workers in Hong Kong”. *Women’s Studies International Forum*, vol. 33-5: 501-511.

Rihanu Alifa

- 2012 *BMI Hongkong Sadar Investasi*, BHSI publishing: Hongkong.

Sim, Amy

- 2010 “Lesbianism among Indonesian Women Migrants in Hong Kong,” in, Yau Ching (ed.) *As normal as possible: Negotiating sexuality and gender in mainland China and Hong Kong*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

Wieringa, Saskia E.

- 1993 “Two Indonesian Women’s Organizations: Gerwani and the Pkk.” *Bulletin of Concerned Asian Scholars*. Volume: 25. Issue: 2.

Tan Chee-Beng

- 2011 “Indonesian Chinese in Hong Kong: Re-migration, Re-establishment of Livelihood and Belonging.” *Asian Ethnicity* 12 (1) : 101-119.

Ming-Yan Lai

- 2007 “Field Note: In Your Face: Indonesian Domestic Workers’ Activism at the World Trade Organization Ministerial in Hong Kong”, *Women’s Studies Quarterly* Vol. 35, No. 3/4, Activisms (Fall–Winter, 2007) , pp. 123-127, Published by: The Feminist Press at the City University of New York.
- 2009 “Surrogate mothering and conjugal insecurity: Indonesian domestics re-envisioning the family in Hong Kong”, *Women’s Studies*, 38:559-576.

The Hong Kong Government

- “2006 Population By-census Thematic Report: Ethnic Minorities.”

Tirtosudarmono, Riwanto

- 1999 “The Indonesian State’s Response to Migration”, *Sojourn* vol. 14-1: 212-228.